日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇一一年(平成二十三年)十二月二〇日
第二號(通巻第二十号)

編集◉京都大学文学研究科　平田昌司
〒606-8501　京都市左京区吉田本町
メールアドレス：chubun.kyoto@gmail.com
発行◉日本中國學會
〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25　斯文会館内
ファックス：03-3251-4853
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org

目録

○二　「雑談」の効用
川合　康三

○四　被災して
花登　正宏

○七　中国朱子学会の成立式典と国際学術シンポジウム
佐藤錬太郎

○九　江右游記
—「哲学与時代　朱子学国際学術研討会」に参加して
井澤　耕一

十一　海を越えた『文選』、海を越える『文選』学
—『文選』与中国文学伝統国際学術研討会参加記
谷口　洋

十三　中国宋代文学学会参加報告
甲斐　雄一

十五　各種委員会報告
大会委員会(花登　正宏)／論文審査委員会(富永　一登)／出版委員会(竹村　則行)／選挙管理委員会(土田　健次郎)／研究推進・国際交流委員会(吾妻　重二)

十八　日本中国学会 平成22年(2010)度 収支決算書

十九　日本中国学会 平成23年(2011)度 予算書

二十　学界展望へのご協力のお願い

二十一　平成23年度会員動向

二十一　平成23年度新入会員一覧

二十二　事務局からのお知らせ

二十三　「国内学会消息」についてのお知らせ

二十三　「研究会等開催の案内」記事募集

二十四　『日本中国学会便り』2001年～2011年総目次

二十八　「日本中国学会」論文執筆要領(2011年10月修正)

「雑談」の効用

理事長
川合 康三

第63回大会は、九州大学の先生方、研究室のスタッフの方々のご尽力によって、大盛会のうちに幕を閉じることができました。各部門で行われた研究発表、町田三郎先生、金文京先生のご講演、充実したそれらに加えて、今回特別に設けられた「漢文教育部門」には現場の先生方も多数お集まりくださり、期待を上回る盛況でした。今後も「日本漢学・漢文教育部門」は継続していくことが決まりましたので、さらに広め深めていくことができると思います。運営にご苦労されたみなさまには心から感謝申し上げます。

開会式のご挨拶のなかで、「大会は研究発表、講演のみならず、全国の研究者と直接接することができる年に一度の機会、お互い声をかけあいましょう」ということを申しました。インターネットの普及によって、電子メール、ブログ、ツイッター、さらにはSNSなど、伝達の手段は飛躍的に増えました。地球のどこにいようと、瞬時に連絡しあえるのは今やあたりまえのことになりました。それはとても便利であるに違いありませんが、だからこそ直接に会う、生身の人間どうしが接触する、そのことの意味がいっそう重みを増すのではないでしょうか。電子媒体では伝えきれない声、表情、しぐさ——人はやはり目の前で向かい合うことによって真の触れ合いが可能なのだと思います。

大会の期間中は、研究発表・講演・展示など中身が盛りだくさんで、実際には思ったほど「雑談」の機会がありませんでした。が、それでも構内に設けられた喫煙所で一服していますと、たばこを吸われない方まで足を止めてくださり、その周りにおしゃべりの輪が何度かできました。そういう機会こそ一堂に会する大会ならではの得難いものと思い起こしています。

わたしの場合、これも年に一度の理事会、その会議が終わったあとで理事の方々と雑談に興じるのが楽しい時間です。今年の春の理事会でも、場所を変えて夜遅くまでおしゃべりを続けました。その席で、理事のお一人、國學院大学の学長に就任された赤井益久さんに無理強いして、大学院の入学式でどんな祝辞を述べたのか、お聞きすることができました。赤井さんがしぶしぶ(?)話してくれたその内容は、わたしたちにも深く関わるかに思われます。ここで公開するお許しをいただきましたので、その概要をわたしなりの理解を通して再現してみます。誤解・曲解が混じるかも知れませんが、ご容赦ください。

——大学院に入学したみなさんは、研究者の道へ進むことを目指して入ってきた。研究とはいったい自分にとってどんな意味をもつものか、改めて考えていただきたい。それは必ずしも研究職を得ることではない。たとえ苦難が待ち受けようと、それに耐えて研究への情熱を持続する、そこに意義があるのだ。かつて伊能忠敬は五十歳まで家業に勤しみ、そのあとで天文学を学びなおして、日本全土の測量地図を作り上げるという大事業を十五年かけて達成した。また塙保己一は全盲の身でありながら学問に志し、五十年をかけて『群書類従』を完成させた。二人が今日まで裨益する大きな業績を成し遂げたのは、何よりも学問への高い志を持続したことにある。それに鑑みて、研究の道を歩むことの意味を自分自身で考えてほしい。……

赤井さんの話にはいろいろな内容が詰まっています。まず職業として研究職に就くことが困難になった状況が暗に示唆されています。国や企業、社会全体の財政が苦しくなってきて経済効率を優先するために、即効性のない教育・研究の分野に最初にしわ寄せが来る、この問題は日本に限らず、世界のあちこちで起こっているようです。加え

て中国学の分野は、日本の文化全体のなかで伝統的、古典的な面が後退しているために更なる苦境に追いやられています。古典の退潮は人間の歴史のなかにおける自然な趨勢であり、やむをえない、という考え方もありうるでしょう。しかしわたしはそうは考えません。今の文化の低俗化が間違った方向に一時的に堕しているに過ぎないと思うのです。かつて人々はそれぞれの時代の古典を尊重し、大切にすることによって高い文化を維持してきました。今、安逸に流れて人間にとって真に大切なものが忘れられていくのは、文化の衰弊にほかなりません。文化の衰弊は人間の衰弊を招くことでしょう。文化の質を高める責務を負うのは、わたしたちの分野もその一つではないでしょうか。冒頭に記した「漢文教育部門」の設置も、当面可能な試みとして位置づけられるものです。初等・中等教育における漢文の学習を活発にすることは焦眉の急であり、またとりあえず着手できる有効な手立てでもあります。ほんのわずかな漢文の単位で資格を得た先生が教える漢文の授業に、生徒たちが知的関心を掻き立てられるとは考えられません。

研究職を得ることは、研究者個人が安定した基盤を得て自分の研究を持続するための条件として大切なことですが、個人にとって必要であるのみならず、文化の面における役割を考えてみても、社会全体にとって豊かな研究者の層を持つことは必要であり、大きな意義を有するはずです。

赤井さんの話は、さらに大きな問題へと入っていきます。「職業としての学問」に限定されず、各自の内部における研究の動機付けを説くのが、この話の根幹と思われます。自分のなかの奥底から湧き起こってくる研究への熱意、学問という大きな営為に自分が加わる意志、それこそが何より必要であり重要であると説く赤井さんに、わたしも深く共感いたします。それは自分という一人の人間の内部における情念でありつつ、同時に学問の伝統に加わる拡がりも含んでいます。例に挙げられた伊能忠敬、塙保己一、いずれも平坦な学者人生を送ってはいません。学問のうえで前人未踏の業績を成就するにはいかほどの労苦があったか、想像に余りありますが、それだけではありません。生活のうえでも苦労はつきまとったことでしょう。伊能忠敬は職業学者ではなく、ふつうなら隠居する身となってから学に志した晩学の人でした。塙保己一は本を対象とする仕事に大切な視力を奪われた人でした。そうした苦難に打ち克つことができたのは、赤井さんの言われるとおり、学問への高い志を持ち続けたからこそのことだったでしょう。わたしたちを取り巻く環境も厳しいものですが、こうした先人の事例を教えられると、めげそうになる気持ちに力が与えられます。

もう一つ、これも雑談のなかから強く印象づけられた話を記します。この学会の会員のお一人から以前うかがったことです。中国古典文学の卓越した学者である葉嘉瑩先生は、その気品あるお姿からは想像もつかないご苦労を重ねて来られたのだそうです。「先生はどうしてかくも厳しい境遇に耐え続けて学問を成就することができたのですか」という問いに対して、葉先生は次のような意味のことを答えられたとのことです。

――蘇軾の人生を見てごらんなさい。政治的対立のなかで一生苦難から逃れられなかった。にもかかわらず、彼は生を肯定し、力強く生きた。蘇軾の文学を読むことで、わたしは自分の人生に耐えることができたのです。

考えてみれば、蘇軾に限りません。中国の古典文学を彩る文人たち、彼らのなかに幸福な人生を送った人はいかほどいたことでしょう。いずれもさまざまな苦難を負いつつ、それに耐えて彼らの文学を開花させたのです。わたしたちの研究対象そのもののなかに、わたしたちの生き方を鼓舞してくれる材料がいくらでもあるというのは、とてもありがたいことです。研究するなかで、それが同時に自分の生き方にも力を与えてくれるのです。

赤井さんのお話に戻ると、もう一つ、わたしたちに示唆を与えてくれることが含まれています。伊能忠敬は十五年、塙保己一は五十年という気の遠くなるような長い歳月をかけて志を成し遂げたことです。研究は短期間に達成できる安直なものでないことがわかります。志が大きければ大きいほど、それを果たすにも長い時間がかかるものなのでしょう。

赤井益久さんたちからうかがったお話をもとに綴ってみました。いずれも雑談のなかで耳に留めたことです。そこからあれこれ考えるきっかけを与えられるのは、じかに会っておしゃべりをすることの効用といえるでしょう。貴重な話題を与えてくださったお二人に感謝いたします。

被災して

東北大学
花登　正宏

3月11日（金）午後2時46分、M9.0という世界でもまれに見る巨大地震が発生しました。そのもたらした津波により、岩手県・宮城県・福島県を中心に数多くの犠牲者の方が出、多くの家屋が失われました。また、この津波により福島原発は甚大な被害を受け、それに起因する原発建屋の爆発事故により大量の放射能が飛散し、そのため周辺に居住される多くの方々がいまなお全国各地に避難を余儀なくされております。

この東日本大震災による人的・物的被害は想像を絶するもので、朝日新聞の第1面に震災以来登載されている「被災者数」によれば、本日6月28日現在、死者15,505名、行方不明者7,305名に達しております。お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。また、被害を受けられた方々の生活が一日も早く通常に復旧することをお祈り申し上げます。

この間、私ども東北大学大学院文学研究科には全国、いや全世界の方々より、激励と物心両面にわたるご援助とが寄せられました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

今回の大震災に際し、東北大学本部では地震発生直後に災害対策本部を設置し、学生・教職員の安否確認とキャンパスの安全確認・確保を行いました。その結果、私ども文学研究科においては、家屋を津波により流された学生は存在するものの、幸いなことに教職員学生ともに人的な被害はありませんでした。人的被害についていえば、東北大学全体で死亡者は3名（いずれも学生。内1名は入学予定者）ということで、内陸部でも地割れ地滑り等で損壊した家屋が相当数存在することを考慮に入れても、今回の地震は確かに津波地震であったと言えるように思われます。また、文学研究科の建物については内壁に亀裂の入ったところはあるものの、使用するに差し支え無しということで、施設部の行った応急危険度判定では建物の使用が可能な「調査済み」の判定を得ておりました。

地震発生時、わたくしは文学研究科棟6階におりました。大変な揺れで、終わるかと思えばまた揺れが始まり、このようなことが永遠に続くのかと思い、もうこれまでかとも思ったこともありました。幸い、3年前に耐震工事を行ったおかげで、揺れが収まった後、建物の中にいた教職員・学生で大きなけがをしたものは皆無であるばかりでなく、建物も先に述べましたように、少し亀裂が生じたくらいで、大きな損壊はありませんでした。3年前の耐震工事により、建物外部の窓のところには見るからに頑丈そうな鉄骨ブレースが無骨にはめ込まれており、その外観が余りよくないため、何もここまでしなくともと言う感を抱いておりましたが、いまではこれのお陰で文学研究科棟は倒壊を免れたのではないかと思っております（写真1）。と言いますのは、文系の部局で、なお耐震工事の施されていなかった国際文化研究科棟と東北アジア研究センターはその建物に甚大な損壊を受け、応急危険度判定で立ち入り禁止の「危険」とされたからです。耐震工事に入る以前、文学研究科棟は東北大学で一番地震に弱い建物とされていましたので、耐震工事終了後に震災にあったのは、不幸中の幸いとしか言いようがありません。

インフラ関係では、電気・水は翌週の月曜日には回復しました。その回復の早いのには驚きました。ガスの復旧については、耐震工事以降、文学研究科棟はガスを使用することが無くなったため、何人かの教職員に聞いてみましたが、誰も記憶が曖昧で、正確な復旧の期日は不明です。ちなみに、自宅では、電気は震災後3日目、水は8日目、ガ

写真1　東北大学文学研究科棟の鉄骨ブレース（花登正宏撮影）

スは24日目に復旧しました。文学研究科棟のガスの復旧は自宅より遅かったので、多分4月中旬くらいでなかったかと思われます。

文学研究科では、人的被害はなく、建物にも大きな被害は出ませんでしたが、研究体制は大きなダメージを受けました。文献中心の研究が主流である文学研究科においては、どの研究室にも大量の資料・書籍を蔵しておりました。それが今回の大地震により足の踏み場もないほど散乱しました。当初は、書籍の海を見て茫然自失し、どこから手をつけてよいかわかりませんでした。しかし、そのままにしておいてよいわけはなく、余震の頻度がやや下がった頃から、各研究室においてあと片付けに着手し、地震から10日後くらいになると、なんとか使えるようになった研究室もいくつか出て来ました。そのような中で、4月7日にはM7.1の最大余震（と思いたい）が起こりました。この余震については、人によっては本震より強かったと感じた人も少なくなく、事実、本震を耐え抜いた建物がこの余震により損壊したということなどもあったようです。研究室に話を戻しますと、せっかく整理した本がまた散乱し、それを整理し直そうという気力が出てくるのにはしばらく時間がかかりました。本震よりも余震の方が精神的なダメージが大きかったと多くの知り合いが言っておりました。

附属図書館の書籍も今回の震災でその殆どが書架より落ち、床に散乱したため、震災後しばらくは休館となっていました（写真2）。図書館員、そしてボランティアが一丸となって早期の開館を目指して尽力されました。図書館のウェブサイトにある「図書館サービス復旧情報」の「提供できているサービス」に基づき復旧の様子を日録形式で示すと次のようになります。なお対象を本館のみとし、医学分館など数カ所の分館については今は触れないこととします。

3月16日　蔵書検索、各種データベース
（オンラインサービス停止）
3月17日　本の返却受付
4月25日　1号館の書庫を除くエリア部分開館
（開架図書・新聞の閲覧及び貸し出し、
文献複写等）
5月16日　1号館地下書庫・2号館（雑誌）
利用再開（時間制限有り）。
6月1日　通常開館

ここに見ますように、完全復旧まで約二ヶ月半かかったことになります。文系の研究者・学生にとって図書館の利用は研究の遂行に直接関わる重大事です。この間、全国の国立大学をはじめとする大学・研究施設が本学の学生・教員に図書館使用の便宜を図って下さったことは、感謝に堪えないところです。

文学部、文学研究科の授業は5月11日より始まり、もう一月半の時間がたっております。東北大学も、話を私ども文科系の研究科のある川内地区についてのみに限定するならば、だんだんと静謐と安穏を取り戻し、大学らしくなってきたと言えるでしょう。しかし東北大学全体で見れば、理学研究科・工学研究科などのある青葉山地区のキャンパスの実験棟及び宮城県女川町の農学研究科付属施設など28棟が立て替えを必要とし、また実験機器7000台も損壊するなど、被害総額は計770億円にものぼり、研究活動に大きな支障が出ています。当面は仮設の実験棟を整備するほか、他大学の施設の使用などに向けた調整を行っていると聞いております。また、今回の震災を機に、学業、研究の継続に困難をきたしている学生・院生が相当数生まれました。予算面での国の大きな支援が期待されています。

最後に、復興を目指す東北大学に対し、皆様のますますのご支援とご協力をお願い申し上げます。

6月28日記

写真2　東北大学附属図書館二号館書庫の被災状況（写真は東北大学附属図書館提供）

中国朱子学会の成立式典と国際学術シンポジウム

北海道大学
佐藤錬太郎

2011年10月9日午前、福建省に位置する厦門大学科学芸術センター（写真1）の音楽ホールにおいて中国朱子学会の成立式典が挙行され、午後には人文学院会議室において「朱子学与現代跨文化意義（朱子学と現代の文化に跨る意義）」と題する国際学術シンポジウムが開催されました。朱子学会成立の経緯とシンポジウムについてご報告いたします。

厦門大学は2006年に国学研究院を設置し、朱子学の研究を中長期の目標として、「朱子学を核心とする南中国の伝統文化の全面的な研究」を推進してきました。国学研究院では学内の中文系、歴史系、哲学系、新聞伝播系、人類学系の二十余りの博士課程、二百名に近い専任教師を再編統合し、朱子学研究の領域で活躍する研究者を集めて豊富な研究実績を挙げて、朱子学会創設の準備を進めてきたそうです。

朱子学会は、厦門大学が中国の教育部と民生部を通じて国務院常務会議に申請して批准された唯一の国家一級の全国学会で、中国教育部が主管し、厦門大学に本部が置かれます。成立式典とシンポジウムの準備を主宰したのは、厦門大学人文与芸術学部主任で国学研究院常務副院長の陳支平教授です。

陳支平教授は明代経済史の専門家で、北海道大学東洋史講座の三木聡教授と旧知の間柄にありました。三木教授を通じて私を招聘したいという陳教授の意向が伝えられました。そこで、陽明学連絡会の会員や『朱子語類』訳注刊行委員会の関係者にも参加の意向を打診しましたが、希望者は皆無でした。参加費用を厦門大学が提供するのに、日本からの出席者が皆無では、今後の学術交流に支障がでる恐れがあると考え、招聘に応じる旨を回答しました。その後、北大大学院の張捷さんと松島愛さんも参加することになりました。

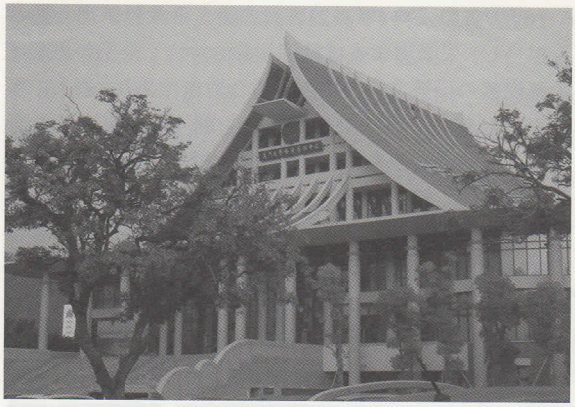

写真1　アモイ大学科学芸術センター（筆者撮影）

私が初めて厦門大学を訪問したのは、今から二十五年前のことです。今は亡き恩師、山井湧教授を団長とする朱熹遺跡調査研究訪中団の一員として、1986年3月に福建省の武夷山、五夫里、朱子墳墓、考亭書院、福州、泉州などの遺跡を見学しました。3月20日に厦門大学を訪問し、山井教授より高令印教授に『朱子文集固有名詞索引』（東京大学朱子学研究会編、東豊書店、1980）を贈呈しました。高令印教授は今もご健在で、清華大学国学院院長の陳来教授と共に朱子学会の名誉会長として招聘されています。現在の厦門市は人口252万の港湾都市として大発展を遂げ、厦門大学のキャンパスも瀟洒でカラフルな建物が林立し、中国国内でも有数の美しい景観を誇っています。私が宿泊した逸夫楼のエントランスをはじめ、あちこちで校訓の「自彊不息」（『易』）と「止于至善」（『大学』）のオブジェを目にしました。構内のホテルは学術交流に多大の便宜を提供しています。

さて、到着した10月8日の夜には厦門大学学長の朱崇実氏主宰の晩餐会に招待され、学長が朱子の子孫で宗家を継いでいると知り、今回の式典とシンポジウム実現に寄せる大きな期待と熱意を感じました。

10月9日の式典（写真2）では、陳支平教授が司会進行を担当し、朱崇実学長は歓迎挨拶の中で、朱子の思想は中華民族の伝統文化の中の貴重な財産であり、過去の事業を受け継いで将来の発展に道を開く上で現実的な意義を具えていると述べました。陳教授が朱子学会の準備状況について紹介した後に、民政部民間組織管理局の廖鴻氏らが祝辞を披露しました。また、徐維凡氏が教育部を代表して祝辞を述べ、厦門大学が「朱子学会」創立を契機として、朱子研究を展開して、中国の伝統文化面で研究成果をあげ、積極的に哲学社会科学と人材育成とを結合して人材育成の品質を高めるよう希望しました。教育部は朱子学研究が道徳教育の一翼を担うことを期待しているようです。さらに、福建省委宣伝部の馬照南氏は、福建が朱子の誕生地で、朱子学研究の重要拠点であることを強調し、朱子学会が朱子学研究の精確化、現代化、大衆化、グローバル化を図り、朱子学に一層の光彩を放たせるよう希望しました。これらの祝辞披露に次いで朱子学会碑の除幕式（写真3）が行われました。

科学芸術センター前で参加者の集合写真を撮影した後、朱子学会の常務理事および理事候補者の名簿について可否を問う投票が行われました。開票直後に第一回理事会が開催され、第一期の常務理事20名、理事会理事69名（福建省内21名、省外48名）が選出されました。理事会投票の結果、厦門大学学長の朱崇実氏が朱子学会会長に当選し、湖南省社会科学院副主席で湖南大学岳麓書院院長の朱漢民氏、華東師範大学古籍所所長の朱傑人氏、北京師範大学哲学与社会科学学院の周桂鈿氏、厦門大学国学研究院常務副院長の陳支平氏が副会長に当選しました。朱子学会成立時の入会会員は168名で、その80％が研究機関に属する研究者で、20％が社会人とのことでした。

写真2　朱崇実学長の挨拶（アモイ大Web公開写真）

写真3　朱子学会碑の除幕（張捷さん撮影）

今後、朱子学会は、朱子学研究と学術交流活動を展開し、朱子学派に関する文献整理、伝世文献の翻訳、文化財の発掘保護に努め、学術書と雑誌を編集出版し、朱子学に関する基礎教育、読書指導、情報提供を実施して、人材育成活動を展開しつつ、朱子学研究の奨学金、教育奨励金を設立して、文化事業者とその他の民間の人士が積極的に朱子研究に従事するよう奨励し、台湾、香港、マカオ地区と海外の朱子学研究者との学術交流を展開する予定です。

9日午後には、厦門大学人文学院の会議室に会場を移して、13:30から18:00まで国際シンポジウムが開催され、二十余名が研究報告を行いました。発表時間は各自20分、質疑応答10分で、私は第一組の最初に「明末的経世論与朱子学—李卓吾与高攀龍的経世論対比」と題する発表を行い、次いで台湾元智大学中国語文学系主任の鐘雲鶯教授が「朱熹《大学章句》之"三綱領"解釈対清末民国民間儒教的影響」と題する発表を行いました。さらに呉伯曜、王立新、丁為祥の各氏が発表しました。同時に第二組、第三組においても哲学、歴史、政治など各面から朱子学の中国文化に与えた影響と時代的意義について研究が行われました。休憩後、15:50から18:00まで私は第二組と第三組の司会を担当しました。同行した張捷さんが最後に「山鹿素行朱子学批判」と題する発表を行い、初日のシンポジウムを終了しました。発表論文は『"朱子学会"成立大会暨"朱子学与現代跨文化意義"国際学術研討会論文集』（厦門大学2011年10月8日～10日）に掲載されています。

翌10日には、私を含めて国内外から招待された研究者二十余名は、マイクロバスに乗って厦門大学を出発し、片道3時間をかけて世界遺産の福建土楼客家民俗文化村に向かい、昼から3時間ほど村内の土楼を見学してから、厦門大学に戻りました。道中、中国社会科学院歴史研究所の王啓発氏や上海師範大学の石立善氏らの朱子学研究者と歓談する機会を得ました。今後、陽明学連絡会や『朱子語類』の訳注刊行に関わる会員には、積極的に中国朱子学会との学術交流を図って頂ければ幸いです。

江右游記
―「哲学与時代　朱子学国際学術研討会」に参加して

茨城大学
井澤　耕一

2011年10月19、20日の両日、江西省廬山白鹿洞書院において、中華朱子学会、南昌大学、九江学院などが共催する「哲学与時代　朱子学国際学術研討会」が開かれた。会議には中国をはじめ台湾、日本、韓国、アメリカ、フランス、ドイツからの参加者約80名が集まり、50篇の論文が発表された。日本からは、吾妻重二氏（関西大学）、湯浅邦弘氏（大阪大学）、竹田健二氏（島根大学）、筆者および現在復旦大学で在外研究中の鶴成久章氏（福岡教育大学）が参加した。

今回の会議は、昨年10月に朱熹生誕880周年を記念して、北京で開催された「人文与価値　朱子学国際学術研討会」の第二回目に当たる。その成果は『人文与価値　朱子学国際学術研討会暨朱子誕辰880周年紀念会論文集』（華東師範大学出版社、2011年）がすでに出版されているので参照していただきたい。昨年は、開会式を人民大会堂で行い、席上刊行されたばかりの『朱子全書　修訂版』『朱子全書外編』『朱子著述宋刻集成』が披露され、会議終了後も福建省において朱熹切手発行式典などの記念行事が多数とりおこなわれた。今年は大規模な式典は無かったものの、朱熹によって再建され中国四大書院の第一に挙げられる白鹿洞書院において、学術発表する機会を得たことは感慨深いものがあった。

初日の午前中は、開会式、記念撮影に続き、基調講演が行われた（写真1）。まず清華大学国学研究院院長の陳来氏が、昨年の「朱子思想中的四徳論」の続編となる「朱子四徳説統論」を発表し、『文集』や『語類』に見える朱熹の「四徳論」を詳細に分析した。続いて吾妻重二氏が、「書院文化与近世中国、東亜世界」と題し、近世における中国、朝鮮、日本、ベトナムの書院または私塾の発展とその特徴を、パワーポイントを使用しながら考察した。

写真1　基調講演

講演終了後、台湾中央研究院の李明輝氏が「朱子思想与現代政治倫理」、アメリカ・アリゾナ州立大学ティルマン氏が「朱子文化復興的潜在力―中国学生『朱氏婚礼現代版』的民意調査為例」、中国人民大学の向世陵氏が「論朱熹的“心之本体”与未発已発」をそれぞれ発表した。その後昼食をはさんで、会場を二箇所に分けてのセッション発表が始まった。

発表は2日目の午後まで行われ、その内容は多岐にわたった。呉震氏（復旦大学）「関於朱子鬼神観的若干問題」、陳栄開氏（香港科技大学）「朱子対『中庸章句』第二十二章的解読」など朱熹自身の思想哲学を論じたもの、朱栄貴氏（台南大学）「朱門之干城―真徳秀対朱子学術之継承及発揚」、井澤耕一「南宋末期士大夫的『四書』解釈研究―通過解読上海図書館『金匱要略方』的“紙背文献”」など朱子の後学について論じたもの、鶴成久章氏「明代科挙制度与朱子学―論体制化教学所帯来的学習模式的変化」など「体制朱子学」について論じたもの、湯浅邦弘氏「日本漢学与朱子学―江戸時代大阪『懐徳堂』

的学術」、竹田健二氏「『重建懐徳堂』的朱子学」、林月恵氏（台湾中央研究院）「羅欽順与日本朱子学」、楊祖漢氏（台湾中央大学）「韓儒郭鍾錫（俛宇）的心論及其対朱子思想的理解」など朱子学の日本や韓国への伝播と展開について論じたもの、さらに朱人求氏（福建師範大学）「朱熹書院教化与道学社会化適応」、方彦寿氏（武夷山朱熹研究中心）「関注民生与書院建設的朱門弟子陳宓」など朱子学及び書院について論じたもの等が発表された。

本来であれば発表された論文を余すことなく紹介すべきだが、紙幅に限りがあるので、中堅・若手研究者が発表した論文のなかで、筆者が特に関心を持った二篇を紹介していくことにする。

殷慧氏（湖南大学）の「論朱熹『儀礼経伝通解』的特点」は、『通解』を朱熹自身の礼学思想を総括した畢生の作であると評価した上で、その編纂過程において、朱熹が永嘉の学の優越性を認識し、そこから触発されて経と史との融合を企図したと結論付けた。朱熹と永嘉の学の関係については、従来その対立部分のみが強調されてきたが、本論では朱熹が永嘉の学の精華を如何に理性的に取り入れたかを考察しており、その観点は実に新鮮であった。

顧宏義氏（華東師範大学）の「“四書”釈名」は、「四書」が書名としていつ頃から使われ始めたのかを検討したものであり、氏は、淳熙九年（1182）朱熹により四書の注が刊行されて以降という通説を否定し、張九成『四書解』、喩樗『四書性理窟』が成った寧宗の嘉定年間（1208—24）であろうと結論付けている。氏は近年刊行された『歴代四書序跋題記資料彙編』（上海古籍出版社、2010年）の編者であり、史料を駆使した精密な考証には大いに啓発されるものがあった。

以上、海内外からベテラン、中堅、若手研究者が集い、自らの研究を披歴した会議は、2日目の午後、陳来氏の総括を以て盛会の裡に締めくくられた。今回発表された論文は、来年、華東師範大学出版社から出版される予定で、会議も、毎年朱熹にゆかりのある場所で開催されると聞いている。筆者としては、本会議が朱子学のみならず、宋代思想を研究する者の真の交流の場として今後も活気あふれたものになることを期待したい。併せて会議の詳細が事前に周知されていなかったこと、セッションの編成が無作為だったため、類似した発表でありながら別グループに分かれてしまったことなど、今後改善すべき点があったことも申し述べておきたい。

また会議終了後、「濂渓墓」を参観する機会を得た。周濂渓、即ち惇頤の墓は、九江市の南東郊外、廬山区周家湾栗樹嶺にある。墓園の総面積は約4平方キロメートルで、牌坊、大門、愛蓮池、状元橋、濂渓祠、愛蓮堂が築かれ、奥の高台に周惇頤、母鄭氏、陸、蒲二夫人の墓があり、その後方の壁面には、「太極図説」「通書」「愛蓮説」碑が嵌めこまれていた（写真2）。『元公周先生濂渓集』所載の南宋・度正「濂渓先生周元公年表」には「熙寧六年（1073）二子寿、燾……　以十一月二十一日葬先生於僊居県太君墓左、従遺命也」とあり、その記述通り、母鄭氏の墓碑は中央、周惇頤の墓碑は向かって右側に立てられていた。周惇頤墓は明、清代そして民国期（1934年）に修復され、1959年には省級文物保護単位に指定されたが、文革期に完全に破壊された。その後、香港・周氏宗親総会の資金援助を得て、1998年に墓は復元され、現在「周敦頤紀念館」として一般に公開されている。現地にて日本から持参した古写真（常盤大定『支那文化史蹟図版』第十輯、法蔵館、1940年所載）と比較してみたところ、盛土の高さや墓碑の装飾が違っていることを除いては、忠実に復元されており、一旦は失われた自国の文化遺産を元通りにしようと懸命に努力している今の中国の姿を垣間見ることができた。

最後に今回の会議を主催し、我々をもてなしてくださった中国側関係各位に感謝申し上げるとともに、来年も世界の研究者が彼の地に再び参集することを祈念して、報告を終える。

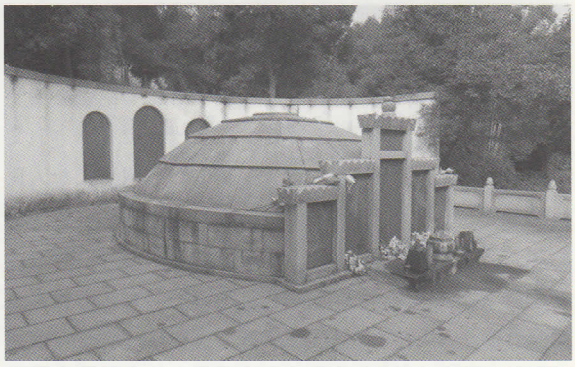

写真2　周惇頤墓

海を越えた『文選』、海を越える『文選』学

―『文選』与中国文学伝統国際学術研討会参加記―

奈良女子大学
谷口　洋

8月に南京で『文選』の学会があることは早くから知らされていたのに、夏が来ても気が進まなかったのは、論文執筆がはかどらなかったからだけではない。震災と原発事故の悪夢に追い打ちをかけるような中国の高速鉄道の事故。おっかないから乗りたくないというのではない、もっとわけのわからない重苦しさを抱え、それでもどうにか論文を送って、上海への飛行機に乗った。

道中はそんな私をあざ笑うように、快適そのものであった。正味2時間少々のフライトを経て、昼下がりにはもう上海駅。高速鉄道の切符が航空券同様の実名制となって、窓口は混雑が予想されたが、職員が手際よくさばいて、ほとんど待たずにすむ。上海－南京間はわずか一時間半。軌間が広く直線が多いためか、静かで揺れない。日本の新幹線を「後ろから鞭で打たれているようだ」と評した鄧小平も、あるいはこれならご満悦だろうか。

昔とは比較にならない便利さと快適さも、事故のあとではいささか色あせて見える。責任追及は、もちろん重要だ。再発防止は、必要に決まっている。しかし福島と温州の2つの事故が突きつけているのは、われわれの享受する便利さと快適さが、とんでもない無理をどこかに強いているということではなかったか。

写真1　分科会討論

『文選』与中国文学伝統国際学術研討会暨第九届『文選』学国際学術研討会は、2011年8月24日から27日まで、南京大学の主催により、華東飯店で開かれた。参加者は約100名にのぼり、日本からは、栗山雅央（九州大学大学院）、静永健（九州大学）、陳翀（九州大学専門研究員）、横山弘（奈良女子大学名誉教授）、芳村弘道（立命館大学、以上五十音順）の各氏、それに私の計6人が参加した。他に香港、シンガポール、韓国、アメリカ、イギリスから参加があり、特に台湾から30人の参加があったのが目を引いた。

24日は報到であり、25日朝8時半から開会式が行われたが、全体に質素なもので、写真撮影をはさんで、すぐに周勛初教授の講演に移った。周教授は、学生時代の経験から説き起こし、南京大学の『文選』研究の伝統と御自身の研究歴について、ユーモアを交えつつ話された。

休憩をはさんで、10時過ぎから4つの分科会に分かれての討論となり、それがその日の午後と、翌26日の午前中、さらに昼休みをはさんで午後3時半まで続けられた。分科会は緩やかな統一を保ちつつ6つのセッションに区切られ、関連する内容の発表が同じセッションに集められた。90分のセッションには4人ずつ発表者が割り振られ、それぞれにコメンテーターがつく。発表時間は1人12分、コメント4分、各セッションの綜合討論が26分と指示されていた。近年は、分科会の組分け（その基準もしばしば不明瞭である）と司会者のみが示され、発言の順序はその場で適当に決めることが多いが、それに比べる

と異例ともいえる周到さである。といってベルが鳴るわけでもなく、討論は自由闊達な雰囲気で進んだ。中国の学会は、講演スタイルの日本の学会と異なり、円卓形式の分科会討論を中心とする。これはうまくいったときは盛り上がるものの、ややもすれば雑談に流れるきらいがあるが、今回は周到なプログラムのおかげで、和やかな中にも終始緊張感が保たれていた。そのアカデミックな姿勢は27日の参観にも発揮され、ありきたりの観光は抜きで、南京郊外の六朝石刻を見るために、小学校の敷地や畑のあぜ道まで分け入ったのである。

寄せられた論文もまた、それにふさわしいものであった。受付でもらった論文集は、上下2冊で1200ページを超える。あまりの重さに量ってみたら3kgもあった。それは、豊富な資料と精密な読解に基づく、大作・力作が多かったからにほかならない。それら全体に目配りして適切に紹介する力量は私にはない。強く印象に残った一つの方向性のみを書く。

『文選』学は伝統ある学問であるが、近代的な文学研究の興起とともに、魏晋南北朝文学研究に包摂されたともいえる。この会でも、『文選』に反映した魏晋南北朝文学の諸相は重要な研究テーマであり、聴きごたえのある発表もあった。しかしより強く感じられたのは、『文選』学が、一方で魏晋南北朝文学研究の、否、中国文学研究の枠さえも越えた可能性を持っていることだ。それは、今回の東道主である程章燦教授が、詞華集を動物園にたとえたアメリカの詩人の言葉から発想して総集の機能を論じた発表などにもよく示されていた。また近年は、中国の研究者も中国以外の資料に目を向けるようになってきたが、ことに『文選』の場合、日本に伝存していた集注本『文選』が2000年に中国でも影印され、注目を集めている。この本は漠然と唐抄本とされていたが、日本人によって撰述されたとする説もあり、近年再び議論を呼んでいる。今回も、日本人撰述説をとる陳翀氏が自説を補強する報告をするなど、活発な議論がなされた。

ことに印象深かったのは、A組第4セッションである。ここでは日本の芳村弘道・静永健両氏と、南京大学の卞東波・童嶺両氏が発表したのだが、芳村氏の報告は日本の版本を駆使したものであり、他の3人は『文選』の日本での受容を論じたものであった。既に実績を積んでいる

写真2　周勛初教授(中)、ご夫人(右)、横山弘会員(左)

日本の第一線の研究者と、これからの学界を担う中国の若手研究者が、日本に伝わる資料を基に『文選』について論じ合う光景は、今回のハイライトであった。

閉会式では、国際学会にふさわしく、北京・台北・ロンドンからの参加者が登壇した。そして日本から、横山弘氏。氏は、周教授が集注本『文選』を影印出版した際、資料の提供などで協力した間柄である。そうした海を越える握手がある限り、私はこれからも海を越え続けるだろう。かつて遣唐使が渡った海を、いとも簡単に、しかし膨大な燃料を燃やして、金属塊を宙に舞わす幻術まで使って。巨大化した現代文明とどう向き合うべきか、今の私にはまだ答えがない。せめて、過去まで含めた文明の陰に潜むきしみに耳を傾け、それを言葉にする努力を続けることだろうか。

『文選』学会は、これまで隔年に開かれてきたが、次回は『文選』学研究会20周年を記念して、1年後の2012年に、創立100周年を迎える河南大学で開かれることに決まり、CCTVの人気番組「百家講壇」でおなじみの王立群教授が挨拶に立った。読者諸賢には、まもなく来るだろう開催通知を楽しみに、今から論文を準備しておかれるようお勧めする。

中国宋代文学学会参加報告

甲斐　雄一

2011年9月16日から20日にかけて、「第七届中国宋代文学国際学術研討会」が開封の河南大学にて開催された。大会要項には171名の発表者が名簿に記されているが、当日の報告はスケジュールに予定されていたものより多かったので、200名弱の発表があったと思われる。日本からは筆者を含めて10名が発表者として参加した。

中国宋代文学学会は2000年に成立し、第2回大会が2001年に南京大学で行われてからは隔年で大会が開催され、今年で第7回となる。大会にて発表された論文は、『宋代文学国際研討会論文集』にまとめられる。その他、雑誌『新宋学』及び『宋代文学研究年鑑』を刊行している。

会場となる開封は、言わずとしれた北宋の都であるが、主催校である河南大学が来年2012年に創立100周年を迎えるのに時期を合わせたのだろう。筆者は当大会に初めて参加するうえ、開封を訪れるのも初めてであった。南宋の陸游を主な研究対象としている筆者にとって、彼が恢復を希求した祖宗以来の地に足を踏み入れるということが、大いに今回の参加を後押しした。筆者は東英寿氏（九州大学）と原田愛氏（同大学院）と同行して福岡の地から開封を目指したのだが、大会前日の15日に出発し、福岡から上海、飛行機を乗り換えて上海から鄭州へ向かい、この日は鄭州で一泊。翌日主催者側に手配してもらって、鄭州から1時間ほど車に揺られてようやく開封入りを果たした。到着まで実に1日半を費やしたのであるから、改めて中国大陸の広大さを痛感させられた。しかしながら、大陸に降り立っただけで不思議と心躍り、少年のようにワクワクしてくるのもまた事実である。

ホテルは河南大学の新キャンパスである金明校区にあり、こちらで「分組討論」、各部会の発表も行われた。開会式（及び閉会式）と代表研究者による「大会論文発言」は、文学院の置かれる明倫校区にて行われた。

開会式の様子

その後、同会場にて代表者による「大会論文発言」へと続いた。開会式後と閉会式前の二回の中で、安熙珍氏（韓国檀国大学）、衣若芬氏（シンガポール南洋理工大学）、そして日本の内山精也氏（早稲田大学）の三名が海外研究者を代表して発表された。

「分組討論」、各部会報告は第一組「詩」・第二組「詞曲」・第三組「文」・第四組「総合」の四部会に分かれ、17日の午後から18日の午前にかけて行われた。筆者は幸いに17日の午後に発表が割り振られていたので、その夜の宴を何の後顧もなく享受できた。それはさておき、順番がちょうど休憩後のトップバッターだったのだが、司会を務める張蜀恵氏（台湾東華大学）が休憩中に綿密な打ち合わせをして下さったので、なんとか無事に発表を終えることができた。他の部会がどうであったかはわからないが、第一部会においては、一人の発表時間を厳密に守って進行されたのが印象的であった。筆者が過去参加

した中国の学会では、どうしても興が乗って時間を大幅に超過してしまう発表者がいたし、伝聞でも「そういうものだ」と聞いていた。今大会も、例えば(きちんと事前に参加表明していた発表者が)進行表の中に名前が記載されていなかったり、会場変更の連絡がいきとどいていなかったりと、いかにも大陸的な「大らかさ」の中で運営されていたのだが、発表時間だけが日本の学会と同様に厳守されていたのが筆者に小さな驚きを感じさせた。

さて、発表が終われば待っているのは宴席である。開封の老舗である第一楼にて宴会が開かれた。名物の小籠包に舌鼓を打ちつつ、下戸ならぬ中戸程度の筆者が白酒に酩酊していたところ、「日本代表」で歌を歌え、との命が下された。筆者が歌を嗜んでいることは既に日本の宋代研究者には周知のことであったので、酔った勢いで「椰子の実」を披露してきた。その後は半ばカラオケ大会のようになっていたが、ある先生から「会稽の恥を雪いだ」とお褒めの言葉をいただいたことから察するに、どうも宋代学会の宴席はそうなることが常態であるらしい。

予稿集に載せられた論文を概観しただけの感想だが、近年来、当学会の会長である王水照氏(復旦大学)が南宋文学研究の重要性を提唱されたからか、南宋に軸を置いた研究報告が充実しているように感じられた。また、討論において、思考のプロセスが議論の焦点となることが散見され、理論を重んじる大陸の学風に肌で触れた思いがした。いずれにせよ、議論を深めるためには、まだまだ現代中国語の運用能力が不足していることも痛感せざるを得なかった。

閉会式では、第一～四組の部会の総括が報告され、40名強の発表が簡潔かつ仔細にまとめられていた。

19、20日は「文化考察」、現地の観光である。19日は少林寺に、20日は市内の鉄塔・龍亭・相国寺を観光した。少林寺の境内にある塔林は、歴代高僧の墓であるが、入元僧で少林寺の首座となった古源邵元による塔銘があるのには驚いた。前述のように、筆者にとっては初めての開封であったので観光もすべて参加させてもらったが、この二日間が最も天候にも恵まれ、観光を堪能することができた。

中国宋代文学学会に参加して、当然のことではあるが、やはり大陸の研究の層の厚さを改めて実感した。また、これから研究を進めていく上で、「大陸の学者の目を引く」ことも意識していく必要があると感じた。「そんなものは学問に必要ない」とのお叱りを受けるかもしれないが、自らの思考を言語化していく過程で、自分の「切り取り方」と彼らのそれとの差異を感じておくだけでも、より思考の客観化を深めることができるのではないだろうか。

帰路、鄭州の空港に行くバスに揺られながら、ふとこんなことを思った。所詮自分は、中国古典文学に魅せられて大陸の浜辺に漂着した「椰子の実」にすぎないのではないか、と。

第一部会の会場

浙江大学留学中の恩師・胡可先先生と

各種委員会報告

大会委員会

委員長　花登　正宏

日本中国学会の本年度の大会（第63回）は、10月8日（土）9日（日）の両日、九州大学で開催されました。九州大学では昭和48年（1973）に開かれて以来38年ぶりの開催で、久方ぶりに九州の地を踏まれた方も少なくなかったのではないかと思われます。

幸い好天に恵まれ、4部会に分かれての研究発表会場では、周到な準備のもと行われた発表とそれに対する活発な質疑応答が続きました。また、8日には町田三郎先生による「九州の漢学者たち」、9日には金文京先生による「韓国の中国学研究の現状紹介」という、いずれも興味深いご講演が行われ、会員諸氏は多くの新たな知見を得られたことと思います。さらに8日夜は福岡リーセントホテルにおいて、多くの会員の参加を得て懇親会が開催されましたが、旧交を温める、また新たな交わりを結ぶよい機会となりました。これらはいずれも、柴田篤大会準備会代表をはじめとする九州大学関係者のご尽力のたまもの、この場を借りて厚くお礼申し上げます。ことに、本年6月4日に開催された理事会の意向により、「漢文教育部会」（公開）を新たに設置していただくことになりました。時間の切迫する中でご準備いただき、多くの会員外の方々の参加をも得て盛会のうちに終わりましたこと、心より感謝申し上げます。お陰をもちまして、本年度大会も成功のうちに終えることが出来ました。

さて、来年度64回大会は大阪市立大学（齋藤茂代表）において、平成24年（2012）10月6日（土）7日（日）の両日に開催されます。大阪市立大学での開催は平成9年（1997）第49回大会以来のこととなります。来年もふるってご参加下さるよう、お願い申し上げます。

なお、10月8日開催の大会委員会において、平成25年度の大会開催は秋田大学にお願いすることと決定し、翌9日開催の理事会において承認されました。秋田大学は昭和50年（1975）以来2度目の開催となります。来年10月に大阪市立大学で開催される評議会において最終的に決定されることになります。

論文審査委員会

委員長　富永　一登

『日本中国学会報』第63集の掲載論文及び学会賞（彙報に掲載）に関することは、前委員会（土田健次郎委員長）のもとで行われた。

6月4日（土）、前委員会の土田委員長・大場幹事と早稲田大学文学部で引き継ぎを行った。現委員会からは、神塚・釜谷の両副委員長、木村幹事と富永が出席した。同日の理事会では、前委員会から推薦された下記の第64集の依頼論文執筆者が承認された。

哲学・思想部門　（評議員）　野間　文史
　　（一般会員）関口　　順
文学・語学部門　（評議員）　内山　精也
　　（一般会員）齋藤　　茂

10月8日（土）2011年度第1回委員会を開催し、以下のことを委員会の意見として理事会に報告することとした。

まず、出版委員会から提案された「論文執筆要領」の修正案について審議し、委員会の意見を次のようにした。

- 学会報の論文の字体は、現行通り原則として正漢字体（印刷標準字体）で統一することを希望する。
- 投稿論文の様式については、従来から行われている掲載論文執筆者と論文審査委員会との加筆修正のことを勘案し、現行の執筆要領のままとする。ただし、掲載頁数には上限を設け、それを越える加筆をした場合は編集担当校から執筆者に決められた頁数内に収まるよう調整を依頼してもらう。このことは、論文審査委員会と出版委員会（編集担当校は委員会のメンバー）の取り決め事項にとどめ、執筆要領などには記載しない。
- 手書き原稿の電子データ化の際に生じる印刷経費の

加算分に関して、出版委員会の修正案に記載されていた「手書きの場合は電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。」という文言を「論文執筆要領」4の最後に書き加える。

「論文執筆要領」全体についても検討し、17の後半の一文「加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負担とすることがある。」を削除することとした。

次いで、投稿論文に対する委員の役割について、以下の点を確認した。

- 投稿論文の担当委員を決め、査読者の意見を担当委員が集約する。
- 掲載論文については、集約した意見をもとに執筆者に加筆修正を求め、その結果を確認した上で、執筆者に編集担当校に送付してもらう。
- 不掲載論文については、集約した意見を不採択理由として執筆者に知らせる。これについては論文審査委員会の責任で行う。
- 査読者に対して、執筆者への通知に際し査読者の意見を活用してもよいかどうかを、あらかじめ確認しておく。

また、査読者3名の選任が難しくなっているので、論文審査委員が査読者になることができるよう、理事会に委員会規約の見直しを検討してもらうことにした。

最後に、委員会の今後の日程を確認した。

- 12月発行の「学会便り」に理事会で承認された「論文執筆要領」(修正版)を掲載する。
- 1月20日の投稿締め切り後、全委員に査読者の推薦を依頼する。
- 1月末に査読者を決定する。
- 3月31日(土)に掲載論文決定などを行うための委員会を開催する。

出版委員会

委員長　竹村　則行

出版委員会の主な任務は『学会報』と「便り」の編集です。『学会報』は今号から編集者と印刷者が一新され、当初は双方の不慣れによる戸惑いもありましたが、幸いに論文執筆者も含めた関係者全員の誠意ある協力によって、期限内の納品と発送ができました。改めて感謝します。年2回発行の「便り」は、第1号は4月既刊、12月刊の第2号は本号です。

出版委員会は7月に京都大、10月に九州大で開き、主に『学会報』と「便り」の編集について協議しました。特に7月は、校正進行中の『学会報』について問題点を議論し、また「学界展望」の読み合わせをしました。今年度の担当は、『学会報』が名古屋大(加藤国安委員)、「学界展望」(哲学)が京都大(池田秀三委員)、同文学が大阪大(浅見洋二委員)、同語学が関西大学(内田慶市委員)でした。また「便り」は今年度2号とも平田昌司出版副委員長が担当します。いずれも格別のご負担をお掛けしています。

現在、学界展望に載せる会員の業績目録の基礎資料を学会のホームページで受付中です。多くの会員の自己申告をお願いします。また科研の採択情況については、学振のホームページをご覧下さい。

最後に、『学会報』の編集印刷に絡んで、出版委で検討した「論文執筆要領」の改正案の骨子を以下に記します。但し、主管の論文審査委による正式文書は本「便り」に載せる「論文執筆要領」です。

(一) 論文の字体は、正漢字体(印刷標準字体)や常用漢字体等の使用を執筆者が選択するようにしてはどうか。

(二) 従来手書原稿で55枚以内としていた枚数制限を、機器入力の枚数(頁数)に換算して頁数を明示し、かつ枚数(頁数)制限をより厳格化してはどうか。

この「便り」の原稿は、出版委から会員へ執筆をお願いしています。原稿の内容は、理事役員等の役務報告以外に、重要なシンポジウムや国際学会の報告、また折々のトピックス等を幅広く含みます。

会員の皆様には、「学界展望」や「国内学会消息」への基礎データの報告と共に、シンポジウムや国際学会等についての情報連絡をよろしくお願いします。

選挙管理委員会

委員長　土田　健次郎

10月8日に、大会開催中の九州大学において、本年度第1回の選挙管理委員会を開催した。そこで、来年実施される評議員選挙、理事選挙、理事長選挙、監事選挙の日程を審議し決定した。その結果、評議員選挙は来年の5月末から6月末にかけて、理事長選挙は7月初頭から8月初頭にかけて、監事選挙は10月になった。

また役員定年や退会のため今年度で評議員を退任される会員と、その繰り上げについて、現段階で確定している部分の報告が委員長からなされた。最終的には来年3月時点の状況をもとに最終確認を行い、該当者全員に通知されることになる。

研究推進・国際交流委員会

委員長代行（副委員長）　吾妻　重二

本委員会では日本中国学会の新たな展開を図るため、昨年以来、①日本漢学研究の推進、②海外学界動向の紹介という二つの提言を行ってきました。これらが理事会で承認されることにより、昨年の第62回大会（広島大学）では「日本漢文」部会が新たに設けられ、今年の第63回大会（九州大学）では「漢文教育部会」が設けられるとともに京都大学の金文京教授による「韓国の中国学研究の現状紹介」の講演につながりました。これらがいずれも好評を博したことに意を強くしています。

今後も以上の二つの方向を発展させていくことは必要と思われ、来年度開催予定の第64回大会（大阪市立大学）に関しても委員会で協議し、理事会において若干の提言を行った次第です。

日本中国学会 平成22年(2010)度 収支決算書

平成22年(2010)4月1日～平成23年(2011)3月31日

(単位：円)

	科目	予算	決算	摘要	差額
収入の部	1. 前年度繰越	¥6,282,852	¥6,282,852		¥0
	2. 会員会費	¥11,000,000	¥11,522,140		¥522,140
	3. 寄付金	¥1,000,000	¥915,000		¥－85,000
	4. 預金利息	¥3,000	¥1,498		¥－1,502
	5. 著作権料分配金	¥0	¥24,000		¥24,000
	総計	¥18,285,852	¥18,745,490	(A)収入総計	¥459,638

	科目	予算	決算	摘要	差額
支出の部	**1. 事務局総務費**	¥2,430,000	¥2,132,885	(1)～(7)	¥297,115
	(1)印刷費	¥950,000	¥932,491	「便り」封筒印刷費を含む	¥17,509
	(2)通信費	¥750,000	¥678,970	「便り」発送費を含む	¥71,030
	(3)交通費	¥20,000	¥82,680	事務局補佐員交通費等	¥－62,680
	(4)消耗品費	¥100,000	¥29,140		¥70,860
	(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
	(6)雑費	¥350,000	¥199,604	うち振込手数料¥122,990	¥150,396
	(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
	2. 事務局人件費	¥1,560,000	¥1,535,000	(1)(2)	¥25,000
	(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
	(2)謝金	¥1,200,000	¥1,175,000	事務局補佐員謝金等	¥25,000
	3. 事務局会議費	¥630,000	¥528,079	(1)(2)	¥101,921
	(1)会議費	¥30,000	¥23,509		¥6,491
	(2)役員旅費	¥600,000	¥504,570	第1回及び第4回理事会	¥95,430
	4. 事業費	¥6,700,000	¥5,313,233	(1)(2)	¥1,386,767
	(1)学会報等刊行費	¥4,300,000	¥4,113,233	イ～ニ	¥186,767
	イ. 印刷費	¥2,000,000	¥1,929,260	学会報及び名簿	¥70,740
	ロ. 編集費	¥1,600,000	¥1,600,000		¥0
	ハ. 翻訳謝金	¥300,000	¥280,000	英文要旨作成	¥20,000
	ニ. 発送費	¥400,000	¥303,973	モリモト印刷業務委託等	¥96,027
	(2)学術大会運営費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
	(3)若手シンポジウム運営費	¥1,200,000	¥0		¥1,200,000

	科目	予算	決算	摘要	差額
支出の部	**5. 各種委員会運営費**	¥1,510,000	¥1,119,326	(1)～(7)	¥390,674
	(1)大会委員会	¥35,000	¥23,985		¥11,015
	イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥20,000	¥18,460		¥1,540
	ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥525		¥4,475
	(2)論文審査委員会	¥580,000	¥453,415		¥126,585
	イ. 通信費	¥100,000	¥144,430		¥－44,430
	ロ. 会議・旅費	¥400,000	¥235,472		¥164,528
	ハ. 謝金	¥60,000	¥60,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥13,513		¥6,487
	(3)出版委員会	¥280,000	¥154,096		¥125,904
	イ. 通信費	¥15,000	¥10,300		¥4,700
	ロ. 会議・旅費	¥150,000	¥91,940		¥58,060
	ハ. 謝金	¥30,000	¥30,000		¥0
	ニ. 学会便り編集費	¥80,000	¥20,000		¥60,000
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥1,856		¥3,144
	(4)選挙管理委員会	¥310,000	¥255,760		¥54,240
	イ. 通信費	¥10,000	¥11,120		¥－1,120
	ロ. 会議・旅費	¥250,000	¥204,325		¥45,675
	ハ. 謝金	¥40,000	¥40,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥10,000	¥315		¥9,685
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥25,000	¥10,000		¥15,000
	イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ハ. 謝金	¥10,000	¥10,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(6)将来計画特別委員会	¥50,000	¥10,080		¥39,920
	イ. 通信費	¥5,000	¥80		¥4,920
	ロ. 会議・旅費	¥30,000	¥0		¥30,000
	ハ. 謝金	¥10,000	¥10,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(7)ホームページ特別委員会	¥230,000	¥211,990		¥18,010
	イ. 通信費	¥5,000	¥8,000		¥－3,000
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ハ. 謝金	¥160,000	¥90,000		¥70,000
	ニ. ホームページ管理費	¥60,000	¥113,990		¥－53,990
	1～5	¥12,830,000	¥10,628,523		¥2,201,477
	予備費	¥5,455,852	¥0	支出費目としては計上しない	
	合計	¥18,285,852	¥10,628,523	(B)支出合計	¥7,657,329
	次年度繰越金	－	¥8,116,967	(A)収入総計－(B)支出合計	
	総計	¥18,285,852	¥18,745,490		¥－459,638

学会基金

	金本基	¥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥877,237
	預金利息	¥1,554
	信託収益金	¥758
	合計	¥879,549

支出の部	日本中国学会賞	¥160,000
	次年度繰越金	¥719,549
	合計	¥879,549

備考(基本金内訳)	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

平成23年5月25日

日本中国学会監事

安藤信廣

加藤敏

大木康

日本中国学会 平成23年(2011)度 予算書

平成23年(2011)4月1日～平成24年(2012)3月31日

(単位：円)

	科　目	予　算	摘　要
収入の部	1. 前年度繰越	¥8,116,967	
	2. 会員会費	¥10,500,000	
	3. 寄付金	¥1,000,000	
	4. 預金利息	¥2,000	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合　計	¥19,618,967	

	科　目	予　算	摘　要
支出の部	**1. 事務局総務費**	¥2,210,000	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥900,000	「便り」・封筒等を含む
	(2)通信費	¥650,000	「便り」等発送を含む
	(3)交通費	¥100,000	
	(4)消耗品費	¥50,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥250,000	振込手数料および対外費を含む
	(7)業務委託料	¥210,000	
	2. 事務局人件費	¥1,560,000	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥360,000	
	(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐謝金を含む
	3. 事務局会議費	¥330,000	(1)(2)
	(1)会議費	¥30,000	
	(2)役員旅費	¥300,000	
	4. 事業費	¥6,550,000	(1)(3)
	(1)学会報等刊行費	¥4,150,000	イ～ニ
	イ. 印刷費	¥1,900,000	学会報及び名簿
	ロ. 編集費	¥1,600,000	
	ハ. 翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
	ニ. 発送費	¥350,000	
	(2)学術大会運営費	¥1,200,000	
	(3)若手シンポジウム運営費	¥1,200,000	

	科　目	予　算	摘　要
支出の部	**5. 各種委員会運営費**	¥1,170,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥65,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥630,000	
	イ. 通信費	¥150,000	
	ロ. 会議・旅費	¥400,000	
	ハ. 謝金	¥60,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥200,000	
	イ. 通信費	¥15,000	
	ロ. 会議・旅費	¥150,000	
	ハ. 謝金	¥10,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥20,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選挙管理委員会	¥20,000	非改選年度
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(6)将来計画特別委員会	¥20,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(7)ホームページ特別委員会	¥215,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. ホームページ管理費	¥200,000	
	1～5	¥11,820,000	
	予備費	¥7,798,967	
	合　計	¥19,618,967	

学　会　基　金

	金　本　基	¥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥719,549
	預金利息	¥1,500
	信託収益金	¥1,000
	合　計	¥722,049

支出の部	日本中国学会賞	¥240,000
	次年度繰越金	¥482,049
	合　計	¥722,049

備考(基本金内訳)	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

❖ 学界展望へのご協力のお願い

『日本中国学会報』には、毎冊、「学界展望」が掲載され、またその基礎資料となる文献目録が学会ホームページに載せられています。これは編集担当校の尽力によって可能な限り広く収集しているものですが、出版物が増加する一方の昨今、捜求はいよいよ困難になっています。執筆されたご本人からのお知らせをお願いするゆえんです。

次号、第64集（2012年10月刊行予定）掲載の「学界展望」の基礎資料として、2011年の文献目録を作成します。2011年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせ願います。

なお、すでに2006年から郵便によるご報告は廃止しておりますので、電子メールでのみお知らせください。

論文も著書も一篇、一冊ごとに部門・分野をご記入の上、以下の該当する部門の担当者にお送り願います。

［哲学部門］　林　克　会員（大東文化大学）
電子メール：nihonchugoku.tetugaku@gmail.com

［文学部門］　浅見　洋二　会員（大阪大学）
電子メール：nihonchugoku.bungaku@gmail.com

［語学部門］　荒川　清秀　会員（愛知大学）
電子メール：nihonchugoku.gogaku@gmail.com

※アドレスは学界展望報告用のもので、次年度以降担当者が変わっても、引き続き使用する予定です。

各部門の分類は以下の通りです。

○哲学部門
一、総記
二、先秦
三、秦・漢
四、魏・晋・南北朝
五、隋・唐
六、宋・金・元
七、明・清
八、近現代
九、琉球・朝鮮
十、日本
十一、書誌学
十二、その他

○文学部門
一、総記
二、先秦
三、漢・魏・晋・南北朝
四、隋・唐・五代
五、宋
六、金・元・明
七、清
八、近現代
九、民間文学・習俗
十、日本漢文学
十一、比較文学
十二、書誌

○語学部門
一、総記
二、文字・訓詁
三、音韻
四、語彙
五、語法
六、方言
七、教育・学習（教科書は含みません）

※国内発行の刊行物に限ります。発表言語の種類は問いません。

2011年度会員動向

◉会員動向（2011年10月31日現在）
総会員数1,863名、準会員数57機関、賛助会員数10社

◉訃報
『学会便り』本年度第1号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。（敬称略）

秋月　観瑛	（関東地区）	2011年5月10日
島　　一	（近畿地区）	
中垣内清貴	（近畿地区）	2009年8月22日
岩城　秀夫	（近畿地区）	2011年7月11日
橋本　敬司	（中国・四国地区）	2011年5月16日
楠山　春樹	（関東地区）	2011年10月30日

◉退会会員
○退会申出会員（第1回理事会承認分）　8名
石井　昌子　韓　玲姫　牧　聡士
三宅　崇広　長島　猛人　速水　愛子
菅谷　省吾　樽本　照雄

○退会申出会員（第2回理事会承認分）　14名
中野美代子　小野　四平　廉澤　教雄
森川登美江　今泉　浩子　尾崎　文昭
澁谷誉一郎　宮内　保　塘　耕次
丸毛　俊宏　西尾　賢隆　西脇　常記
村瀬　玄鼎　永末　嘉孝

○4年会費未納による退会会員　24名

◉住所不明会員　28名
阿部　順子　荒井　知子　王　京鈺
高　倩藝　古城　広恵　山谷　悦子
宮内　四郎　玉野井純子　新島　翠
原　貴史　前田　利昭　吉田千奈美
羅　党興　張　猛　安部　史絵
鎌田　崇嗣　田村　将　蔡　麗玲
三瓶奈津子　朴　在慶

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください（メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org）。

2011年度新入会員一覧

10月7日開催の評議員会で入会が承認されたのは、以下の通りです。

◉通常会員　19名
豊島ゆう子　東北大学（院）
及川　茜　日本学術振興会（特別研究員）
佐藤　良　大東文化大学（院）
品田　有理　大正大学（院）
張　竹翠　お茶の水女子大学（院）
天神　裕子　お茶の水女子大学（院）
冨田　絵美　青山学院大学（院）
范　文玲　お茶の水女子大学（院）
竹澤　英輝　中部大学（非）
李　海　名古屋大学（院）
井口　千雪　京都府立大学（院）
榧木　亨　関西大学（院）
野田　悟　高野山大学
劉　小俊　京都女子大学
武内　真弓　広島大学（院）
韋　佳　広島大学（院）
工藤　玄之　青雲高等学校
駱　丹　熊本学園大学（院）
連　凡　九州大学（院）

なお、以下の方々については6月に開催された持ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度の名簿に記載されています。

◉通常会員　19名
大久保洋子　笠見　弥生　金木　利憲
佐髙　春音　高橋　治代　李　苑儒
金　明蘭　張　名揚　卞　維行
田中　郁也　鄭　巍巍　西川　芳樹
楊　洋　中村　友香　岡村　寿子
岩崎華奈子　東　美緒　金　程宇
深川　真樹

事務局からのお知らせ

彙　報

第1回理事会（6月4日開催）での決定事項を受け、6月6日付で通信による臨時評議員会を開催した。報告事項は以下の通り。

・2011年度日本中国学会賞受賞者の決定について

［哲学・思想部門］

久米　晋平「李二曲の「反身実践」思想―その四書解釈をめぐって―」

［文学・語学部門］

大渕　貴之「『藝文類聚』編纂考」

橋　　千早「講經文の上演に関する一考察―P.2418《父母恩重經講經文》の分析を中心に―」

・新入会員の決定について

通常会員17名、国外会員3名（3月28日開催の2010度第4回理事会承認分を含む）の入会希望があり、審議の結果、全員の入会を承認。

また、10月7日開催の今年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

［報告事項］

・理事長による会務報告
・各種委員会報告
・『日本中国学会報』第63集及び名簿の発行について
・学会報編集担当校・学会展望担当校・大会開催校について

学会報編集担当校	名古屋大学
学界展望編集担当校	哲学／大東文化大学
	文学／大阪大学
	語学／愛知大学
学術大会開催校	大阪市立大学（2012年10月6日［土］～7日［日］）

・会員動向について

［審議事項］

・2010年度決算報告・監査報告
・2011年度予算案について
・新入会員の承認
・第63回学術大会総会次第について
・池田前理事長の顧問就任について

翌10月8日の総会において、評議員会の議決事項が報告された。

◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2カ年（2010・2011年度）未納の方には、本年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

郵便振替口座：00160-9-89927

◎住所・所属機関等の変更について

近年、学会からの送付物（学会報・便り等）の発送に宅配業者のメール便を利用しています。メール便では一般に転居先への転送が行われませんので、転居の際は速やかに事務局までご通知ください。また、所属機関に変更が生じた場合、特に学生会員の皆さんが学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡くださいますようお願い申し上げます。

メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org

◎論文執筆要領について

学会報63号に掲載のものは、旧バージョンです。論文投稿の際には、この「学会便り」に掲載されている新しい執筆要領に従って提出願います。

❖「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行の「学会便り」に載せることになっています。

2011年1月から12月までに開催されました国内学会の原稿は、来年（2012年）2月末日までに、下記宛にE-mailでお送りください。入力していただいたものをそのまま印刷します。校正はありません。この点、あらかじめご承知くださるようお願いします。

chubun.kyoto@gmail.com（「学会便り」2012年第1号編集用アドレス）

〒606-8501　京都市左京区吉田本町

京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室　平田昌司

❖「研究会等開催の案内」記事募集

「学会便り」には、会員の参加が予定される各種研究会等の案内を掲載いたします。

・1月から4月に開催される予定のものは、12月発行の「学会便り」に、

・5月から12月に開催予定のものは、4月発行の「学会便り」に、

掲載します。研究会等の開催を計画されている場合は、研究会の名称、開催日時・場所、連絡先などを、上記アドレスにお知らせ願います。

『日本中国学会便り』2001年～2011年総目次

◉『日本中国学会会報』

2001年第1号（4月20日）（総6ページ）

理事長就任の御挨拶　興膳　宏　1
何の為の中国学か？―理事長退任の御挨拶―　福井　文雅　2
彙報　4

◉『日本中国学会便り』（『日本中国学会会報』を改題）

2001年第2号（12月20日）（総24ページ）

私の日本中国学会初体験　興膳　宏　2
「第１回」蘇軾逝世900年記念学会に参加して　野村　鮎子　4
中唐文学会の説　静永　健　6
中国古典小説研究会の紹介　中里見　敬　8
各種委員会報告（合山究・丸尾常喜・筧文生・池田知久・川合康三）　10
日本で開催される中国語国際会議（IACL-11）の御案内とお願い　岩田　礼　16
第17回ISO国際会議に参加して　松岡　榮志　17
平成13年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧　18
平成12年（2000年）度収支決算書・平成13年度（2001年）収支予算案　22

2002年第1号（4月20日）　通巻第1号（総16ページ）

福永光司先生のこと　興膳　宏　2
六朝学術学会の紹介　上田　武　4
宋代史研究会参加の記　市来津由彦　6
ライデンに滞在して　釜谷　武志　8
「李商隠与中晩唐文学国際学術研討会」の報告　詹　満江　10
「紀念魯迅誕辰一二〇年学术研讨会」　岸　陽子　12
委員会からの報告（久保田知敏）　14

2002年第2号（12月20日）　通巻第2号（総24ページ）

日本シノロジーの位置　興膳　宏　2
200回を通過した中国文芸座談会　竹村　則行　4
魯迅と「二十四孝」　梁　音　6
各種委員会報告（合山究・丸尾常喜・筧文生・池田知久・川合康三・福井文雅）ほか　8
8ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG 第19回国際会議　報告　松岡　榮志　14
日本学術会議に関する報告　興膳　宏　15
平成14年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧　16
平成13年（2001年）度収支決算書・平成14年度（2002年）収支予算案ほか　21

2003年第1号（4月20日）　通巻第3号（総16ページ）

事務局体制の刷新について　興膳　宏　2
中国近世語学会　佐藤　晴彦　4
宋代詩文研究会の活動スタンス　内山　精也　6
「中国現代文学研究者の集い」（通称「前夜祭」）をめぐる断想　宇野木　洋　9
2002年度委員会報告（池田知久・丸尾常喜）　12

2003年第2号（12月20日）　通巻第4号（総36ページ）

第二回日本漢学国際学術討論会に参加して　興膳　宏　2
日本中国語学会　中川　正之　4
紹介：「関西中国女性史研究会」の歩みと『ジェンダーからみた中国の家と女』などについて　筧　久美子　6
宋詞研究会の設立と第一回研究会の開催　萩原　正樹　8
理論の話　森　由利亜　10
日本中国学会第55回大会を終えて　松本　肇　13
二年間の幹事経験から　木津　祐子　15
各種委員会報告（合山究・筧文生・富永一登・中嶋隆藏・池田知久）ほか　18
平成15年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状

況一覧 24
平成14年(2002年)度収支決算書・平成15年度(2003年)収支予算案 31
「日本中国学会会則」の改正案(第2次案)について 池田 知久 33

2004年第1号(4月20日) 通巻第5号(総16ページ)
上野本『王勃集』のことなど 興膳 宏 2
人文学における共同研究と情報発信 湯浅 邦弘 4
中国学の情報化と漢字文献情報処理研究会 二階堂善弘 6
東京都の大学改革 南雲 智 8
各種委員会報告(筧文生・中嶋隆藏・丸尾常喜・池田知久・丸尾常喜) 11

2004年第2号(12月20日) 通巻第6号(総40ページ)
新体制の四年間 興膳 宏 2
二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築について」 佐藤 保 4
中国当世学会事情—「中国中世文学国際学術研討会」に参加して— 内山 精也 7
アメリカの中国文学研究瞥見 浅見 洋二 10
読陶詩会 稀代麻也子 13
「R25のつぶやき」—大学院生から— 関 清孝 15
各種委員会報告(北岡正子・筧文生・富永一登)ほか 17
平成16年度 日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧 23
平成15年(2003年)度収支決算書・平成16年度(2004年)収支予算案ほか 30
「日本中国学会会則」の改正について 池田 知久 33

2005年第1号(4月20日) 通巻第7号(総20ページ)
新体制第3期の初めにあたって 丸尾 常喜 2
学会、学界と個人研究 金 文京 4
日本聞一多学会へのお誘い 牧角(竹下)悦子 6
先生 佐藤 浩一 8
研修キャンプ 川合 康三 10
2004年度論文審査委員会報告(筧文生)ほか 12
平成16年度 日本学術振興会科学研究費補助金採択一覧続補 14

2005年第2号(12月20日) 通巻第8号(総36ページ)
日本中国学会—個人的な体験 丸尾 常喜 2
近代東西言語文化接触研究会(略称:接触研) 内田 慶市 4
東方詩話学会へのお誘い 蔡 毅 6
《新出土簡帛醫藥文獻研討會》参加報告 名和 敏光 8
各種委員会報告(竹村則行・三浦國雄・川合康三・中嶋隆藏・竹下悦子)ほか 10
日本学術会議と人文学中国学の将来 藤井 省三 15
日本学術会議研究連絡委員会報告 土田健次郎 17
第19期東洋学研究連絡委員会のこと 池田 知久 17
旧日本学術会議分野別研究連絡委員会について—評議員会(10月7日)への報告から 18
会則の変更について(選挙管理委員会・池田知久) 19
平成16年(2004年)度収支決算書・平成17年度(2005年)収支予算案ほか 25
平成17年度 日本学術振興会科学研究費補助金採択一覧 27

2006年第1号(4月20日) 通巻第9号(総24ページ)
中国における日本中国学の翻訳—現代文学の場合 丸尾 常喜 2
2005'白居易詩歌国際研討会に参加して 下定 雅弘 4
日中対照言語学会 高橋弥守彦 6
「にんぷろ丸の出帆」 早坂 俊廣 8
「日本中国学会会則」の変更に関する投票結果のお知らせ 竹下 悦子 11
2005年度委員会報告(三浦國雄・竹下悦子) 12
国内学会消息(平成17年1月1日〜12月31日) 14

2006年第2号(12月20日) 通巻第10号(総32ページ)
中国における日本中国学の翻訳—現代文学の場合(補遺) 丸尾 常喜 2
「東アジアの経典解釋における言語分析」第一回國際學術シンポジウム参加報告 近藤 浩之 4

第13回唐代文学会に参加して　土谷　彰男　6
中国学への提言——外から見た日本の中国学研究　第58回日本中国学会オムニバス講演会要旨
・人文学における個人研究と共同研究　片岡　龍　8
・明清イスラーム文献からの視点—回儒の著作研究会の歩み—　青木　隆　10
・中国学にとっての学理的反省　馬場　公彦　12
・国外流出資料の発掘と中国学の新たな展開～イベリア半島における漢籍調査をもとにして～　井上　泰山　14
各種委員会報告（竹村則行・三浦國雄・川合康三・竹下悦子・池田知久）ほか　16
平成18年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧　22
平成17年(2005年)度収支決算書・平成18年度(2006年)収支予算案ほか　28

2007年第1号（4月20日）　通巻第11号（総20ページ）

中国研究をとりまく困難の中で　池田　知久　2
よく分からないままに　大上　正美　5
三国志学会の設立—学際的な研究の場を求めて　渡邉　義浩　7
委員会からの報告（三浦國雄・竹下悦子）ほか　9
国内学会消息（平成18年1月1日～12月31日）　14

2007年第2号（12月20日）　通巻第12号（総32ページ）

中国、山東大学での集中講義雑感　池田　知久　2
「儒蔵」日本編纂委員会とその事業　戸川　芳郎　4
21世紀型日本中国学会への豹変を期待して　佐藤　正光　7
中国語学研究『開篇』　古屋　昭弘　10
各種委員会報告（竹村則行・土田健次郎・川合康三・藤井省三・神塚淑子・堀池信夫・渡邉義浩）ほか　12
平成18年(2006年)度収支決算書・平成19年度(2007年)収支予算案ほか　20
平成19年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧　22

2008年第1号（4月20日）　通巻第13号（総24ページ）

日本学術会議・東洋学アジア学研究連絡協議会・ICANAS-40のこと　池田　知久　2
『朱子語類』訳注刊行会について　佐藤錬太郎　5
2007年柳宗元国際学術討論会に参加して　下定　雅弘　7
中国語教育学会　古川　裕　8
日本中国学会第59回大会傍聴記　曹　虹（野村鮎子訳）　11
各種委員会報告（土田健次郎・神塚淑子）　13
国内学会消息（平成19年1月1日～12月31日）　14
日本中国学会六十年記念行事について　23

2008年第2号（12月20日）　通巻第14号（総32ページ）

再び理事長職を拝命して—上海師大中哲創新団体との連携の経過報告　池田　知久　2
古代文字資料館　吉池　孝一・竹越　孝・中村　雅之　5
関西大学グローバルCOE「文化交渉学教育研究拠点」（ICIS）　吾妻　重二　7
減少する人文学の大学教員数　富永　一登　11
各種委員会報告（竹村則行・土田健次郎・藤井省三・川合康三・神塚淑子）　13
平成20年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧　20
平成19年(2007年)度収支決算書・平成20年度(2008年)収支予算案ほか　20
会計報告に関する補足・お詫び　竹下　悦子　29
学会基金についての補足説明　29

2009年第1号（4月20日）　通巻第15号（総20ページ）

若手と古手　池田　知久　2
副理事長退任にあたっての所感こもごも　池田　秀三　5
第14回唐代文学会に参加して　中木　愛　7
村上哲見氏、恩賜賞・日本学士院賞受賞のお知らせ　池田　知久　8
宮紀子会員の日本学士院学術奨励賞受賞のお知らせ　竹下　悦子　8
各種委員会報告（土田健次郎）　10

国内学会消息（平成20年1月1日～12月31日）　10

2009年第2号（12月20日）　通巻第16号（総32ページ）
第61回文教大学大会－雑感と補遺　池田　知久　2
科學學國際シンポジウム－第5回“科學制と科學學”シンポジウム－（國際科學研討會－第五屆“科學制與科學學”研討會）　佐藤錬太郎　4
王維・輞川国際学会に参加して　郭　穎　6
中国留学と家族制度への関心　仙石　知子　8
各種委員会報告（竹村則行・土田健次郎・富永一登・神塚淑子・藤井省三・堀池信夫・渡邉義浩）　11
平成20年（2008）度収支決算書・平成21年（2009）度予算書ほか　16
平成21年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧　18
国内学会消息（平成20年）補遺　31

2010年第1号（4月20日）　通巻第17号（総20ページ）
2010年度初めに当たって－ご挨拶とご報告　池田　知久　2
各種委員会報告（土田健次郎・神塚淑子・渡邉義浩）　7
国内学会消息（平成21年1月1日～12月31日）　8

2010年第2号（12月20日）　通巻第18号（総32ページ）
2010年度広島大会を振り返って —任期終了の挨拶と報告　池田　知久　2
「学界展望」をめぐって —旧・出版委員会から—　川合　康三　4
日本中国学会若手シンポジウムの開催について　渡邉　義浩　6
東アジア文化交渉学会　陶　徳民　7
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫が50周年を迎えるにあたって　高橋　智　10
国際中国語言学学会第18回年次総会に参加して思うこと　竹越美奈子　15
「百年中文」の学舎に吹いた"DIY"の新風—北京大学中国語言文学系主催「活在“現代”的“伝統”：国際博士研究生及青年学者専題研討会」に参加して　成田健太郎　17
金陵瑣言　村田　みお　18
各種委員会報告（竹村則行・土田健次郎・富永一登・神塚淑子）　21
平成21年(2009)度収支決算書・平成22年(2010)度予算書ほか　24
学生会員の会費値下げについて　29
科学研究費補助金採択状況の不掲載について　31

2011年第1号（4月20日）　通巻第19号（総28ページ）
お見舞いとご挨拶　川合　康三　2
第1回若手シンポジウム実施報告　静永　健　4
和漢比較文学会について　後藤　昭雄　6
章炳麟シンポジウム「第一回「東亜学術思想」国際学術研討会：章太炎与晩清中国学術」に参加して　坂元ひろ子　8
国際ワークショップ「現代中国における儒教復興 —フィールドからの調査報告」参加記　水口　拓寿　10
「香港：都市想像與文化記憶」国際研討会に参加して　山口　守　12
中国の方言研究はなにをめざすか？ —「首届中国地理語言学暨中日方言保存利用国際学術研討会」報告　岩田　礼　14
国内学会消息（平成22年）　16

2011年第2号（12月20日）　通巻第20号（総28ページ）
「雑談」の効用　川合　康三　2
被災して　花登　正宏　4
中国朱子学会の成立式典と国際学術シンポジウム　佐藤錬太郎　7
江右游記—「哲学与時代：朱子学国際学術研討会」に参加して　井澤　耕一　9
海を越えた『文選』、海を越える『文選』学－『文選』与中国文学伝統国際学術研討会参加記　谷口　洋　11
中国宋代文学学会参加報告　甲斐　雄一　13
各種委員会報告（花登正宏・富永一登・竹村則行・土田健次郎・吾妻重二）ほか　15
平成22年（2010）度収支決算書・平成23年（2011）度予算書　18
『日本中国学会便り』2001年～2011年総目次　24

「日本中国学会報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用いる。なお、第1ページの見易い場所に、投稿原稿を1行20字毎ページ20行に変換した場合の枚数を明記する。原稿量の上限は、字数ではなく、枚数によるので注意する。手書きの場合は電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として正漢字体（印刷標準字体）に統一する。活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語・拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例孫逸仙Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内　日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想または文学・語学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、両部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校　正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜　刷

18. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

そ の 他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）
（平成13年5月13日修正）
（平成14年10月13日一部修正）
（平成15年10月5日一部修正）
（平成19年10月7日一部修正）
（平成20年5月17日一部修正）
（平成21年10月11日一部修正）
（平成22年6月6日一部修正）
（平成22年10月10日一部修正）
（平成23年10月9日一部修正）